

音楽が結ぶ27年ぶりの日本感動旅行

はバレエを踊って私をもてなしてくれました。こんど聞いてみると、ご主人は六年前になくなり、あのときのお嬢さんも結婚してお子さんを持ち、幸福に暮らしているとのことでした」と、ジャワのク

タンダールを論じ合ったり、戦争がすんだらインドのカルカタあたりへ行つて、東洋平和の精神を研究しよう、と話していたのを、クラウスさんはよく記憶していらつしやいました。そんな話の間に、ピアノをひいて聞かせていたとき、かわい

き、かわいとお嬢さん、といった交際を続けていた。一兵卒としてジャワへ上陸したオルガニストの奥田耕天氏（現青山学院大助教授）が、クラウスさんにピアノを習ったのもそのころである。奥田氏はいま渡米中だが、私の名を、日本で知っていた。

ニュース・ストーリー

と、ふいに若い兵隊がたずねてきました。一年ほどの間、軍務のひまにやっていたのは、リリー・クラウス、リリー・クラウス、と、ピアノから発声法までなんでも教えてくれたといわれましたわ」と、クラウス女史は笑いに思

い出す。こうしてジャワ放送管理局は、海外向けという特別の環境のおかげで、クラシック音楽はもちろん、当時禁制のジャズも放送できたし、インドネシアの歌や日本の民謡のアレンジも流し、月に二回は、どは定期演奏会をもつことができた。なかでも序巻が、クラウス女史のピアノだったことはいままで

もない。オーケストラを指揮する飯田信夫氏は、ベートーベンの交響曲を第八までやり、「つぎはチャイコフスキーのピアノ協奏曲をどうでしょう」と女史と相談しているとき、突然、女史の一家は収容所へ入れられてしまった。

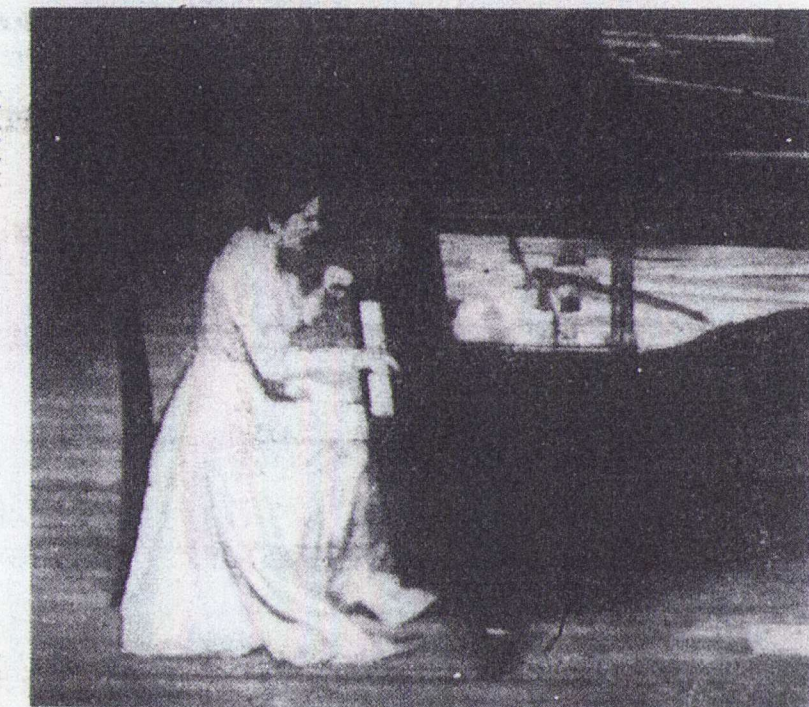
「こんどは私が慰め役」収容所では男女別が規則ですが、とくにクラウス女史一家は、つしよに住めるよう回りました。収入の道はなし、さぞ不自由なことだろうと、一度か二度卵を届け

た。それから十七年あまり。平和な日本を訪れたクラウス女史は、演奏のかたわら、知人と相交をあたためている。戦争にからまる不快な思い出のかけもとどめず、女史はつぎの歌うに語る。「人間はだれも同じような願いをもち、同じような感情をもつのでし

二十七年ぶりに来日したハンガリー生まれのピアノリスト、リリー・クラウス女史は、毎日新聞社主催で、一月二十四日の上野・東京文化会館を皮切りに全国各地を演奏旅行して、多数の聴衆に深い感動を与えている。

おひとよしの「おばさん」

昭和十一年にはじめて来日し、バイオリニストのシモン・ゴールドベルグとジョイント・リサイタルを開いたときは、二十七才の妙



演奏中のリリー・クラウス女史（東京文化会館で）

齢だったクラウス女史も、五十代のなかばをむかえ、髪には白いものがふえ、白のレースのブラウスにこげ茶のカーディガンをはきかけたところは、女流ピアノリストというよりも、おひとよしの「おばさん」といった印象。

「戦前、日本へ来たときは、近衛秀磨さんなどといっしょのステージでした。まだ東京見物はしていませんが、大きなビルが建ち並んですっかり変わったみたい。でも、当時にもチャイミングで、それにみなさん信じがたいほど音楽をよく理解して鑑賞なさいます。上野で初演の夜も、私がなんの努力をしなくても聴衆が一心に耳を傾けてくださるので、私はまるで羽がはえて

飛んだようにうれしかった……」と女史は、二十七年ぶりの日本、の感想を語ってくれた。ジャワ島で抑留生活、だが、その二十七年ぶりの日本、とともに、日本人、についても女史にとっては忘れることのできない思い出がある。太平洋戦争開戦のときインドネシアのジャワ島に滞在していたクラウス女史は、そのまゝ三年あまり日本軍占領下で抑留生活を送り、多数の日本人と知り合った。当時の事情を、十六年三月の敵前上陸と同時に、宣伝班という軍属の文化部隊としてジャワ入りした作曲家の飯田信夫氏は、

「私は音楽担当ということで、戦火がおさまるとさくそくオランダ軍捕虜の軍楽隊をつくって日本軍の慰問をしました。が、参謀本部に、敵兵を使つてはいかん」としかられてしまいました。ニロムというオランダ系の放送局を接収して、ここからジャワ・婆羅洲放送などもすることになっていたので、あらためて演奏者を集めなければならぬ。元放送局オーケストラのメンバーを中心に、四十人ばかりの団籍、楽器もまちまちなオーケストラを編成しました。そのと

ピアノリスト、リリー・クラウス女史の話題



思い出の人々を語るクラウスさん

と飯田信夫氏はいうが、当のクラウス女史は、

「プリズンでもとても親切な、心をくばった待遇を受けました。コンドウ司令官はいい人で、彼女は音楽家だからピアノを入れてやれ、と命令してくれました。とにかく私は、日本人に悪感情をいだいたことはないともありません」ときっぱりいえる。

二十年八月、日本の敗戦の日がきた。釈放されたクラウス女史はまっさきに放送局へやってきて、力いっぱいグラランド・ピアノをひいた。飯田氏が、

「たいへんでしたね。だがこんどは、ボクが収容される番です」と話しかけると、女史はピアノの手をとめて、

「勝った組が交代したんですもの。なぐさめるのはこんどは私の役ね」と、親切にことばを返してくれ

き、クラウスさんもジャワにいらつしやるのがわかり、ソリストとして協力をお願いしたわけですから、戦争のおかげで、私もあのような大家と知り合いになり、いろいろと勉強できました。三十そこそこのクラウスさんは元氣いっぱい、いつもダイナミックな演奏ぶりでした。ただ、ちょうどあからのの年代に、不慣れた収容所暮らしをさせたのは、やむを得なかったといえお気の毒でした」といっている。